

東日本大震災追悼記念礼拝

石の板と心の板

2024年3月11日

東北学院大学文学部総合人文学科
日本基督教団仙台松陵教会協力牧師
藤野 雄大 牧師

聖書：コリントの信徒への手紙二 3章3節-6節

³ あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。

⁴ わたしたちは、キリストによってこのような確信を神の前で抱いています。⁵ もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。⁶ 神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。

2011年3月11日2時46分、大きな揺れと共に、私たちの生活は一変することになりました。観測史上最大となるマグニチュード9.0の地震とその後に襲った津波により、死者・行方不明者を合わせて2万2千人以上の犠牲者が生じる歴史的な大災害となりました。

震災の直後、私は岩手県の釜石市にボランティアとして訪れたことがあります。その時の光景は今も目に焼き付いています。そして、先日、震災から13年を経た現在の被災地の姿はどうなっているのかと、再び三陸海岸を巡る旅をいたしました。街全体の復興は大きく進み、震災遺構を例外にすれば、かつての光景を想起させるものはほとんどありませんでした。もちろん復興は街の整備だけで終わるものではなく、人の心の復興については、まだ長い時間を必要とすることでしょう。しかし、13年という長い時間が大きな変化をもたらしたことを実感しました。

さらに今年は、特に1月1日、まさに新年を迎えた日に、能登半島地震が発生し、甚大な被害を出し、現在では千葉県で地震が群発している状況にあります。このような中で、改めて認識させられるのは、この日本という国は、必ず地震が起きる場所であるということです。私たちは、この国に住み続ける以上、大きな地震が起きるたびに、それを驚くのではなく、常に大地震を想定して、備えをしていくことが求められていると言えます。

そこで重要になっていくのが、震災の記憶を伝承し、その教訓を忘れないようにしていくということになります。しかし、実際には、それは簡単なことではありません。そもそも、

被災された方にとっては、震災の記憶とは忘れようとしても決して忘れられない記憶であるとともに、心の傷跡を抉られる、できれば忘れてしまいたい、思い出したくない記憶でもあります。

また東日本大震災から13年目を迎える今、少しずつ記憶の風化が進んでいると指摘されています。時が経つ中で、追悼式を行う自治体の数は半減し、震災後被災地に建てられた伝承館や記念館の中には経営難に直面しているところもあるようです。さらに震災の記憶を語りつたえるボランティアの数も、高齢化と世代交代によって減少していると言われます。このような中で、被災された方々に寄り添いつつ、同時に震災を知らない世代へと、記憶を形骸化させることなく伝えていくことが、現在の課題と言えるでしょう。

そのような中で、東北地方を中心にキリスト教会や、宮城学院や私の勤務する東北学院などのキリスト教主義大学でも、時を同じくして13年目の東日本大震災追悼記念礼拝が捧げられていますが、これは重要な意味のあることだと思います。なぜなら、キリスト教は、数千年の歴史の中で、世代を超えて聖書の言葉を語り伝え、またイエス・キリストの十字架と復活を語り伝えてきた共同体であるからです。しかし、それは当たり前のように行われてきたわけではなかったことにも心を留めるべきでしょう。聖書の言葉を語り継ぐこともまた、形骸化や風化との戦いであったからです。

本日の聖書箇所であるコリントの信徒への手紙第二は、いわゆるパウロ書簡の一つです。この3章3節以下で、使徒パウロは、二つの印象的な対比を用いています。それは、「墨と神の霊」、そして「石の板と心の板」という対比です。石の板というのは、旧約聖書に記されている十戒を指しています。皆様もご存じのように、十戒というのは、神から与えられた10の戒めであり、律法全体、旧約聖書全体の中心とも言えるものです。

それほど重要な十戒ですが、聖書によると、十戒は、二度にわたって石の板に彫られましたが、二度とも失われてしまいました。最初の石板は、モーセがシナイ山で神から授けられましたが、その直後、民衆が神の戒めを忘れ、偶像崇拜に陥っている様を見たため、モーセが怒って打ち砕いてしまいました。その後、再び同じ内容を彫った石板が作られ、今度は木の箱に納められました。その箱は、「主の契約の箱」と呼ばれ、後に、エルサレム神殿に大切に保管されることになりました。しかし、この2番目の石の板を納めた箱も、その後の長い歴史の中で最終的には所在が分からなくなってしまいます。

このような中で旧約聖書の預言者たちは、神との新しい契約を強調するようになります。例えば、エレミヤ書31章には、「来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれであると、主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す」(エレミヤ31:33)とあります。またエゼキエル書37章には「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。私はお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える」(エゼキエル36:26)とあります。神との新し

い契約は、石の板ではなく、心の中に記されるものであると、旧約の預言者たちは考えたのです。使徒パウロも、このような旧約聖書の議論を踏まえつつ、本日の聖書箇所を記しているのです。

石の板に刻まれた文字は壊れたり、失われることがあります。また時代の中で形骸化し、形としては残っていても、その精神は忘れられてしまうことがあります。だからこそ石の板に刻みつけるだけで安心してしまうのではなく、心の板にこそ、教えを刻むべきだと言うのです。たとえ聖書に記された神の言葉であっても、それを読む者が、頑なであれば、その言葉は、生きた言葉にはなりません。聖書の言葉は、石の心ではなく、聖霊の導きにより、柔らかな心で受け止めることで、はじめて命の言葉となり、また「生きた教え」になるのです。

このことは、私たちにとっても重要な意味を持っているように思います。つい最近、ある震災史の専門家の記事を読みましたが、非常に印象に残っています。その方によると、東日本大震災で甚大な被害を受けた三陸海岸沿いでも、今回の能登半島地震で被災した地域でも、これまで長い歴史のスパンでは、何度も津波が襲来し、その都度、集落が流され、人命が失われてきましたそうです。しかし、世代を経るごとに、かつて津波の被害のあった場所に、ほとんど例外なく、新しい家が建てられてきたということです。そして、それが大きな被害を生んだ要因になっていると指摘されていました。

もちろん、当事者でない我々が、それを安易に批判するのは慎むべきでしょう。海と共に暮らし、生きてきた人々にしか理解できない思いというは、確かにあるからです。しかし、同時に忘れてはならないのは、震災の教訓についても、それが「石の板」に記されているだけでは十分ではないということです。実際、被災地では、過去の津波の被害を伝える石碑が残されてはいました。しかし、それでも死者・行方不明者併せて2万2千人という非常に多くの犠牲者が出たという事実は受け止めなければいけません。一方、その中であって津波の伝承が生きていた地域では、比較的被害が少なかったという指摘もあります。

また震災後には、震災の記憶を風化させないために、各地に堅固なコンクリート製の伝承館が建てられました。そして、教会やキリスト教主義学校では、こうして毎年記念礼拝を捧げています。それ自体は非常に重要なことです。しかし、震災を記憶した物が存在しているから、あるいは記念礼拝を捧げているからというだけで、教えが十分に生かされているとは言えないのだと思います。なぜなら形骸化や記憶の風化は常に起きてしまうものだからです。

私は、本日の礼拝説教を準備しながら、我が家を点検してみました。すると、恥ずかしい話ですが、部屋には、本が高く積み上げられ、また台所の食器類も、非常に不安定なまま置かれていました。13年の時が経つ中で、次第に危機感が失われ、「生きた教え」であった震災の記憶が少しずつ形骸化している証したと感じました。多くの被害を出しながら得た震災の教訓を、「石の板に刻まれた死んだ文字」にしてしまう

のか、「心の板に刻まれた生きた教え」として次世代に伝えていくことができるのか。それが震災後を生きている私たち一人ひとりに問われています。この礼拝を通して決意を新たにし、キリスト教主義学校に務める者として、共に祈りを合わせ、知恵を共有し、建学の精神であるキリスト教的視点に立って、この課題に取り組んでいくことが求められているのではないのでしょうか。